

のがある。例えば、第1章で、「日常生活の中に病院医療が深く入りこみ、医療の専門知が社会を支配する医療化社会」と述べているが、第2章の中では、「医療の社会化、すなわち国民のすべてに対し、治療給付及び予防給付を受けうる機会が均等に与えられるよう、国家ないし社会の責任において給付の提供方法について措置を講じていくこと」となっていて、この両者の相互の関連が判然としない。また、多数の資料を踏渉し(注)として掲載しているが、その中で『厚生指標』とあるのは、財団法人厚生統計協会(現・一般財団

法人厚生労働統計協会)発行の月刊誌の名称であり、著者が引用しているのは、同誌の増刊号である『国民衛生の動向』であると思われる、中には、109ページ(4)のように正しく書かれているところもあるので、正確を期した方がよいのではないだろうか。

(宮武 光吉)

[法政大学出版局, 〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7, TEL. 03(5214)5540, 2011年11月, 四六判, 259頁, 2,800円+税]

香月牛山 原著, 中村節子 翻刻・訳注 『老人必用養草——老いを楽しむ江戸の知恵——』

日本医史学会(2011年6月)での演題発表後、5カ月で単行本として出版されたというスピード出版の本である。それだけ現在の超高齢化社会で待ち望まれる書だったのであろう。

本書は大きく3部から構成されている。日本医史学会の理事長長井シヅ氏による「序——老いを生き、老いを楽しむ江戸の知恵」、中村節子氏による全5巻から成る本文の翻刻と訳注、同学会理事小曾戸洋氏による「解説——香月牛山の生涯と業績」である。このような短期間で本書が出版されたということは、執筆者たちに本書に対してのふだんからの準備があり、機が一気に熟したと思われる。また出版社にも必要性の認識があり、1,500円という低価格での販売に踏み切ったものと思われる。これら4者の協働があって、この世に出版されたのであろう。

学会発表時の共同研究者としての立場からみると、本書は日本医学史上きわめてユニークな位置づけにあるといえる。日本の医学に老人のことが専門的に取り上げられたのは桃山時代の曲直瀬道三『啓迪集』の「老人門」である。しかしこれは医者向けの専門的な医学書であり、漢文体である。老人を対象とした専門医学書としては江戸期

の本書が最初である。『国書総目録』のなかで「老人」という名前のついた書物の項目をみても、宗教書、教訓、雑記、随筆、雑史、などの分類で約20冊掲載されているが、医学書に分類されるものは本書が唯一である。

牛山(1656-1740)は九州出身で、若い頃には貝原益軒に学んだ経験を持つ。本書を著したときは60歳で84歳まで長生きをした。益軒の『養生訓』(1713)にも「養老」の項目があり、益軒も長生き(84歳)をして養生を実践したと思われるが、牛山も書き著したことを自ら実践したと思われる。現代の医療系・福祉系学生だけでなく、医療実践者自身にとっても老年期の参考になろう。

『老人必用養草』(1716)は江戸期の日本人のくらしと老いの「保養」を説いたものである。巻1 養老総論、巻2 飲食、巻3 衣服、住居、季節、巻4 精神保養、身体保養、性欲、巻5 老人疾病治療、付録諸薬の処方、で構成されている。訳注にあるように中国の医書、特に元時代の『寿新養老新書』がよく参考にされている。文体は漢字かな混交文で読みやすく、漢文ではないことから一般庶民を対象にしているが、付録に薬方が載っ

ており、地方の医療者にも参考となったものと思われる。

内容のなかで特にすばらしいと思ったのは、巻1にある平安時代の清少納言の書『枕草子』にある老人の引用である。『枕草子』は文学書として有名であるが、それだけではない。牛山からみると、老人の年の功の例が載っているのである。それは老人を捨てたり殺したりしていたある時代に、自分の70歳代の親を地下室に匿っていたある中將の話である。あるとき、唐の皇帝がわが国の知恵を試そうと2つの難問を出し、天皇も悩まれたというが、中將が親に聞いて解答しそれが正しかったので、日本はかしこい国であると悟ったという。中將は、褒美には官位ではなく隠されている老親を探し出し、都に住まわせてほしいと希望し許されたという。牛山は、老人は見聞が広く尊重すべきであることを知らなければならないとしている。『枕草子』を引いた牛山の日本の古典籍に関する教養の高さを知ることができる。

本書の翻刻・訳注を担当した中村節子氏は看護史研究会の主要なメンバーの一人で、助産師、看護教員、訪問看護師を経験されている看護職であ

る。これまでに、江戸時代の平野重誠の『病家須知』をはじめ、『革谿医砭』『養生訣』『玉の卯槌』などを研究し、人物史、翻刻・訳注の研鑽を積まれている。しかし平野の著作には老人に関する記載が少なく、当時の老人はどのように処遇されていたのか関心を持ったという。また中村氏は牛山と同じ九州出身であり、高校時代から彼に関心を持っていた。

本書が医学・薬学・看護学の3分野の協働で出版の運びになったことには意義がある。これまで漢方史の領域に看護学が迫ることは少なかった。しかし3者混合の視点、すなわち、バランスのとれた医療史の視点でみえてくるものがあることを本書は示したのではないかと考える。今後の研究の新たな方向性ともいえるのではないだろうか。

牛山についていえば、彼の養生3書といわれる、『小児育草』『婦人寿草』『老人養草』が将来的にセットで出版されることを期待したい。

(平尾真智子)

[社団法人 農山漁村文化協会、〒107-866 東京都港区赤坂7-6-1、TEL. 03 (3585) 1141、2011年11月、A5判、208頁、1,500円+税]

坂井建雄 編

『日本医学教育史』

卒前卒後医学教育の変化

日本の卒前医学教育は最近10年間に著しい変貌を遂げた。卒前卒後医学教育の標準化、教員主導型教育から自己開発型問題解決学習へ、学体系型知識重視教育から良医が備えるべき臨床能力・対人技能の質担保教育へ、など医学教育の主軸が大きく変わってきている。

教育に携わる人間も増えた。ほとんどの医学部に医学教育専任部署が設置され、医学教育専任の教員が任命されている。医学部教員ばかりでなく、市中病院の勤務医も学外実習で医学生への教育に携わるようになった。医学教育はもはや教授・

准教授・講師・助教などの教員に限られた営みではなく、教育病院勤務医・看護師・薬剤師・検査技師などの医療関係者、更には一般人すらも模擬患者として学生教育や学生評価に関与する時代となった。

この度上梓された「日本医学教育史」は、医学史研究者はもちろんのこと、これら医学教育に関わる広範な人々にも、日本の医学教育がどのように展開してきたかを教えてくれる良書である。本書は、体系性を持った医学教育が始まった近世日本から、世界標準を念頭においた現代日本の医学教育に至るまでの変遷を、いくつかの断面から捉